

豊門会館本館（旧和田豊治向島自邸）について

駿河小山、富士紡績の建築 その2

正会員
同

西 和夫 1*
山田由香里 2**

豊門会館 和田豊治 富士紡績株式会社
清水組 向島 大正 12 年園遊会記録フィルム

はじめに

駿河小山（現静岡県駿東郡小山町）に明治 29 年(1896)に設立された富士紡績株式会社が、大正 14 年(1925)に従業員と地域住民の福利厚生を目的に財団法人豊門会館を設立し、その建物や庭園が良好に現存することは、別稿で報告したとおりである¹⁾。

豊門会館本館は、富士紡績の経営拡大に大きな役割を担った和田豊治（1861～1924）の、東京向島にあった自邸を移築したものと指摘されてきたが²⁾、詳細についてはこれまで明らかにされていなかった。調査の結果、移築資料、向島時代の園遊会記録フィルムなどが見出され、建築の様相や歴史的背景が明らかになった。以下に報告する。

1. 建築の様相

豊門会館本館は、高台にある敷地の東側に、西面して立地する。木造で、2階建て瓦葺き入母屋造りの和館に、平屋建てスレート葺き寄棟造りの洋館が付属する（図1）。間取りは図2の通りである³⁾。和館の玄関は、入母屋破風をつけ、扉は唐戸、内部正面に額が掛かり、「豊門会館、昭和辛未七月、九十二翁青洲」、青洲すなわち澁澤榮一（1840～1931）が昭和6年に書いたものである。



図1 豊門会館本館西側外観 和館（左）と洋館



図3 豊門会館本館内観 座敷十五畳（左）と洋館客室

2階の幅1間半の大床を備えた座敷十五畳（図3左）と次の間十畳は、大空間を構成する。現在、園内に樹木が茂っているが、以前は南側板縁から鮎沢川の上流と下流にある工場や周囲の山並みを見渡せ、富士紡績の厚生施設にふさわしい景色を眺めることができた。2室に続く座敷八畳は、社長や重役の宿泊に使われ、幅2間を一枚板とする大床を備え、天井は畳大の杉板を畳の敷き方と同様に張るなど、格の高さを窺わせる。

洋館は、大壁構造、床は寄木、壁はクロス貼りで周囲を丸紐で押さえ、天井は漆喰塗りでモールディングを施す（図3右）。北側に大理石のマンテルピース、東側にサンルーム、南側に出窓を配し、窓は上げ下げ窓で、建具は重厚な彫刻を施す。

基準寸法は、1間を6尺とする芯々設計で、和館の内法高が5尺7寸、天井高が1階で9尺1寸8分、2階で9尺3寸2分、洋館の天井高は11尺6寸3分である。

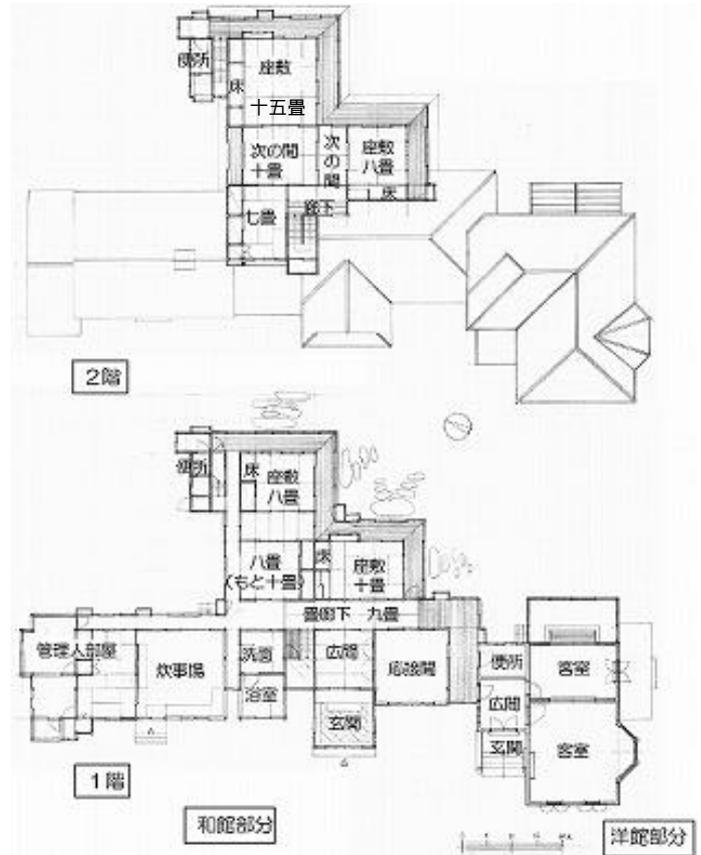


図2 豊門会館本館 平面図

2. 移築の様相

小山町の保管する富士紡績歴史資料から、移築の様相を知ることができる。

大正 13 年、財団法人豊門会館理事会において、和田家遺族から寄贈を受けた邸宅を受領し、記念館として整備することについて了承する稟議が行われた⁴⁾。その後、富士瓦斯紡績株式会社と清水組のあいだ⁵⁾で、大正 13 年 7 月に見積書、翌 14 年 7 月 6 日に請求書、同年 10 月 13 日に建築費支払決定が交わされている。

見積書の、但書きに「向島和田様御別邸一部取解、御社小山工場迄運搬建設工事御入費」、仕様概要に「建物取解釘仕舞致シ、造作其他各仕口共養生シ、東海道線駿河駅へ輸送、御社小山工場内へ在家ノ儘ノ形ニ建設ノ事」と記され、また請求書の「出来高整書」にも造作取解・養生材料・補足木材・運搬費の工事項目が含まれている⁶⁾。これにより、確かに向島の和田豊治旧邸を移築したこと、工事は清水組が担当して大正 13 年から 14 年にかけて行われ、輸送に際して仕口等を養生し、元の状況のとおり駿河小山に建てられたことが判明する。

現在の建物を見ても、一部の柱の納まりなどに若干の傷があるのみで、床や天井板の大面積の化粧部材にも全く損傷がなく、丁寧な仕事で移築されたことが窺える。

3. 向島時代の様相 - 園遊会撮影フィルム

東京向島の和田豊治の自邸は、『偉人和田豊治翁』⁷⁾や『和田豊治伝』⁸⁾によると、住所は本所区向島隅田川附近須崎町 237 番地で、池沼に数百の海棠のあったことから海棠園と呼ばれた成島筑後守の屋敷⁹⁾を、明治 25 年頃豊治が購入し、明治 42・43 年頃に建物を建設した。

明治 42 年の地図「上野・日本橋」¹⁰⁾の須崎町 237 番地部分を見ると、豊治の自邸は南北に細長い敷地で、北側に鉤型の大きな建物があり、南側には池がある(図 4 左)。池の存在は、先の海棠園の記述を裏付ける。大正元年の地図「向島須崎町北部」¹¹⁾の該当箇所には、「和田豊治」の書き込みがあり、西側の通りに面した北寄りには門らしき記号がある(図 4 中)。

また今回、『和田豊治家園遊会』と題する大正 12 年 4 月 15 日の園遊会を記録したフィルムが見出された¹²⁾。収録された建物を豊門会館本館と比較すると、和館と洋館



図 4 東京向島の和田豊治自邸地図 上が北
左から：明治 42 年、大正元年、現在の航空写真

の構成のみならず、玄関や洋館の出窓・サンルームの意匠にいたるまで、全く同一である(図 5)。フィルムには、多くの来客を招き、洋館前の池畔に組んだ舞台の催しを、春の日差しのもとで楽しむ様子も記録されている。

この園遊会から半年後の 9 月 1 日に、関東大震災が発生した。広い邸宅は迫る火を食い止め、大火を逃れた多くの人の避難所となったという¹³⁾。

おわりに

豊門会館本館についてまとめると次のようになる。

近代紡績業に功績を残した和田豊治が明治 42・43 年頃に東京向島に建てた自邸で、大正 13・14 年に駿河小山に移築された。和館と洋館が破綻なく構成され、規模が大きく、細部意匠も優れ、質の高い近代和風建築である。関東大震災をくぐり抜け、移築にあたっては向島時代の様相が忠実に再現された。記録フィルムや歴史資料が現存し、近代財界人の暮らしぶりや清水組による移築工事の様相が明らかで、歴史的価値をさらに高める。



図 5 上：向島時代の和田豊治自邸外観 (映画フィルムのシーンをつなぎ合わせた)
下：豊門会館本館 南側外観

[註] 1)「豊門会館の設立と様相について 駿河小山、富士紡績の建築その 1」2005 年度日本建築学会学術講演梗概集。2)『静岡県の近代化遺産 静岡県教育委員会・2000、『静岡県の近代和風建築』同・2002。3) 部屋名は、小山町提供の移築当時の様相を示す図面に書き入れられたものによる。名称は、畳裏の部屋名などとも一致する。4)「故和田豊治氏邸宅一部寄附受領ノ件」小山町保管富士紡績歴史資料。5) 明治 39 年から昭和 20 年の名称。清水組は合資会社で、代表者清水釘吉。6) 他に、地形工事、石工事、軸部工事、屋根工事、左官工事、建具工事、畳表替敷込、鋳方工事、塗師工事、大工手間、同手伝、水盛遣形下小屋、大小釘、諸雑費。7) 三木作次郎編輯、1925。8) 喜多貞吉編輯、和田豊治伝編纂所、1926。9) 現地には、墨田区教育委員会による「成島柳北の住居跡」の説明板が立てられている。しかし、豊治の自邸であったことについては触れていない。10)『明治前期・昭和初期 東京都地図 1 東京東部』(柏書房、1995)収録。11)『墨田の地図その二』(墨田区立緑図書館・1987 年、原本は大正元年「本所区地籍地図」東京市区調査会)収録。12) フィルムタイトル「大正十二年四月十五日、於向島、和田豊治家園遊会、日本活動寫真株式会社」(右図)。無声の 35mm 可燃性フィルム。2005 年 1 月の調査時点は富士紡績の所蔵であったが、東京国立近代美術館フィルムセンター研究員常石史子氏から、希少性、資料的価値の高さ、可燃性フィルムの保管について御教示を受け、その後富士紡績が寄贈し、現在はフィルムセンターが所蔵保管する。13)『偉人和田豊治翁』。敷地は現在言問小学校(図 4 右)。



*神奈川大学工学部教授・工博

**平戸市教育委員会 技師・工博

*Prof., Faculty of Engineering, Kanagawa University, Dr.Eng.

**Research Engineer, The Hirado City of Education, Dr.Eng.